

ふくいを生きる

第1景

超高齢社会

即席ラーメンは二つに割って2日に分けて食べた。申し訳ないと思いつながら、他人の畑から野菜を頂戴したこともある。福井市の男性(71)は「アイコン一本で、3日は生きられた」。

アパートの電気やガスは何度も止められ、ろうそくの火で夜を過ごした。男性は30代で離婚し一人暮らし。2人の子どもの所在は分からない。

「最近まで、1カ月の収入は国民年金の5万円だった。このうち介護保険などで約1万5千円が差し引かれた。約3万円の家賃を何カ月も滞納し、大家からは「出て行ってほしい」と言われた。男性は肺気腫とせんそくで、病院の薬は長持ちさせるために間引いて服用。その後は市販の薬で我慢した。

「階段の上り下りだけで息が切れた」が、1日8千円の

② 金の切れ目は命の切れ目

解体業のアルバイトで何とか生計を立ててきた。しかし65歳を過ぎると依頼は減り70歳のときにはゼロになった。足羽川にかかる橋のたもとで、何度も身を投げようと思った。唯一の慰めは、野良猫を眺めることだった。

引越しを機に通うようになった光陽生協クリニック(福井市)は、生活が苦しい人の医療費を減免する「無料・低額診療事業(無低診)」を実施していた。男性は「命を救ってもらった」と振り返る。同クリニックの無低診の上半年(4~9月)相談件数は



貧困で生活が成り立たず、何度も自殺を考えたという70代の男性=福井市内の病院

声上げられぬ貧困者

は2014年は13件だったが、16年は38件。認定世帯は4件から26件に増えた。

しかし薬代は対象外で、男性の薬の間引きは続いた。スナップから薬代も無料になる生活保護を勧められ申請。こ

れまで「明日は何を食べようか」と眠れなかったが、ゆっくり休めるようになった。県内の生活保護世帯は06年度は1780だったが、16年10月現在で88・5%増の3356。県地域福祉課の担当者

は高齢者の単身世帯が増え、年金だけでは生活できないことが背景にあると説明する。全体のうち高齢者世帯は56・4%を上回る。

(民医連)の15年の調査によると、医療費が払えず受診が遅れて亡くなった人は、本県男性1人(70代)を含む63人に上った。本県男性を診察した同クリニックによると、男性は末期の結腸がんで、それまで病院にはかかっていなかった。痛みをこらえきれず搬送されたが、もはや治療できる状況ではなかった。

(堀英彦)